

57 赤城信一について（第一報）

○上田智夫・小竹英夫・宮下舜一

赤城信一は天保十年生まれの会津の医師であり、戊辰、会津、函館の戦争に参加し、戦後開拓使に出仕して札幌本道建設に従事、のち公立室蘭病院の初代院長、札幌に出て北海道医事講談会（北海道医師会の前身）の副会長をつとめるとともに、東北学院長押川方義の洗礼を受けて、北海道キリスト教（新教）の先駆者として、室蘭、伊達、札幌などで長老の地位にあつた。また娘は白石藩片倉家に嫁し、登別開拓の功労者であつた。

今回は彼の生涯の前半、函館戦争までに就いて述べた

い。赤城信一は、会津北郡の医師の長阿部家の生まれだが、幼くして叔父の赤城家に養子として入って赤城家を継いだ。

養家赤城家は、系図によれば藤原の出で、摂津、上野の国、会津と転地し、会津塩川に移つた保秀の代から医家となつた。

会津では当初「日新館志」を著述した吉村寛泰の弟、吉村二州に医学を学んだ。

安政五年、十九歳の時江戸に出て、当時流行していたコレラの治療に当たるとともに、会津藩の医師仮雇勤となつて棒三口を給される。

その後伊東貫斎、織田研斎等に医学を学んだとするが、正規の門弟とみなされないのか、象先堂門人録に名は記されていない。

そのうち上司と衝突して学業半ばにして、猪苗代に帰り、二十四歳の時広瀬キサと結婚する。

慶応二年になって、会津藩は赤城信一と大島某の二名を選出して長崎遊学を命ずるが、世情はこれを許さず、京都に留まって会津洋学校学生となるとともに、砲兵隊付医官となつた。

鳥羽伏見の戦においては、白井五郎太夫の大砲隊に属して戦つたが、敗戦によって再び会津に帰つた。

会津戦争においては、江戸より馳せつけた松本良順の指揮下で、南部精一郎、古川春英等とともに戦陣医療に当り、かつ医学の教育を受けた。戦の末期にいたって、病兵を米沢に送る事を命ぜられるが、米沢藩は入国を拒否し、やむなく仙台の伊達家に病者を托すことになった。

その後江戸を脱走した榎本武揚の海軍に参加して、長鯨艦に乗組み、蝦夷地鷲木浜に上陸して函館を占領する。

榎本軍施政下の函館にあつては、バリ万博から帰国した高松凌雲が函館病院本院を守って官軍幕府軍の別なく治療に当り、赤城信一は手狭の為増設した高竜寺の分院を担当した。この時の同僚医師に、有島武郎の「或る女」のモデル、佐々城信子の父伊東友賢がいる。

戦役中函館病院本院は、高松凌雲の沈着な応対と、薩軍中の人物によつて流血の惨はまぬがれたが、高竜寺分院は松前、津軽の兵の襲うところとなり、病院掛も傷病兵も惨殺され、赤城信一も負傷して捕われ、のち久留米に幽囚される。

ちなみに、明治元年十一月函館病院に拠つてから、二年八月下旬までに治療した病者総数は千三百四十人。内

三百八十二人は銃創、金創であり九十七人が死亡。九百五十八人は難病で、三十四人が死亡した。

この中で市中病者は九十八人を数え、うち銃創者二名を含んでいたという。

(北海道医史学研究会)